



Chopin & Ravel

圧倒的な技術に驚嘆、興奮しても、
「素敵だった」という余韻を残してくれる演奏は意外に少ない。
菊地裕介はその希少な機会を与えてくれるピアニストである。
彼の卓越した技術は、ただ聴衆を圧倒するのではなく、作品の魅力を実感させ、
次にどんな音楽が展開するのかという期待を持たせてくれる。
彼の技術は整頓された身体の使い方によって生み出された自然なものであり、
作品に込められた作曲家の言葉や想いを豊かに引き出す。
奏者に卓越した技巧と、多彩な歌い回しや描写力、
幅広い強弱の表現を求める今回の選曲は、
菊地の魅力を最大限に味わうことができるものであろう。

Program

ショパン: 12の練習曲 作品25

Chopin, Frédéric: 12 Etudes Op.25

第1番	変イ長調 「エオリアンハープ」 1. Etude in A ^b major 'Aeolian Harp'	第7番	嬰ハ短調 7. Etude in C [#] minor
第2番	ヘ短調 2. Etude in F minor	第8番	変二長調 8. Etude in D ^b major
第3番	ヘ長調 3. Etude in F major	第9番	変ト長調 「蝶々」 9. Etude in G ^b major 'Butterfly'
第4番	イ短調 4. Etude in A minor	第10番	口短調 10. Etude in B minor
第5番	ホ短調 5. Etude in E minor	第11番	イ短調 「木枯らし」 11. Etude in A minor
第6番	嬰ト短調 6. Etude in G [#] minor	第12番	ハ短調 「大洋」 12. Etude in C minor 'Ocean'

～休憩～

ラヴェル: 夜のガスパール

Ravel, Maurice: Gaspard de la nuit

オンディーヌ Ondine
絞首台 Le Gibet
スカルボ Scarbo

Program Note

ショパン: 12の練習曲 作品25

Chopin: 12 Etudes Op. 25

「練習曲」は、19世紀において、単なる技術向上の為の作品ではなく、「無言歌」のような、キャラクターピースの一種といえるものであった。とりわけフレデリック・ショパン(1810-1849)のそれは、到達すべきテクニックが明確でありながら、美しい旋律や色彩豊かな和声変化を紡ぎ出すことも求められる。複雑な音の重なりの中から旋律を浮かび上がらせ、歌い上げる書法は、彼が傾倒し、創作にあたり意識したバッハの「平均律」に通じるものがあるだろう。

さらに作品25の《練習曲》は、作品10のものよりも重音奏法やオクターヴ、跳躍といった技術の向上に重きが置かれ、そこに抒情的な歌い回しを融合させることが要求される為、より一層滑らかな指や腕の運びと、微細な和声変化への感覚が必要となる。さらに、この練習曲集にはあらゆるピアノ曲を通して最難曲の一つとされる、3度の重音奏法の練習曲(第6番)が含まれている。羽ばたくようなトリル、縦横無尽に駆け回る重音の半音階を右手が奏する間、左手は腕の重みを活かし、溜息のような旋律を豊かに歌い上げなくてはならない。これらの練習曲を彈きこなす、自在な指・腕の運びを行う為には、自然な呼吸を絶えず意識し、身体に通わせることが求められるのである。

ラヴェル: 夜のガスパール

Ravel: Gaspard de la nuit

自然な指、腕の運びは、モーリス・ラヴェル(1875-1937)の《夜のガスパール》でも最大限に効果を発揮する。1908年、ルイ・ベルトラン(1807-1841)の詩集から3篇を選んで書かれたこの作品は、ピアノ・ソナタを意識した古典的形式美と、テクストから得た着想を描き出すロマン派的思考、色彩美に満ちた印象派の和声が融合したもの。

第1曲〈水の精〉は、急速な分散和音や音階に彩られており、水の精の、人間の男に対する恋慕と失恋の様子を描写する。第2曲〈絞首台〉で一貫して奏される変口音のオクターヴは、どこからか聞こえてくる鐘の音を表すと同時に、「死」へと向かう主人公の「時」を残酷に刻む。また、絶えず変化する拍子は、絞首台にぶら下がる屍骸、死肉を貪る虫といった様々な凄惨な情景と結びついて恐怖心を煽るのである。いたずら好きの地底の精を描いた第3曲〈スカルボ〉は、部屋中を駆け回り悪戯をしかけるスカルボの様子と、急速な連打、縦横無尽に駆け回るアルペジオ、跳躍など、あらゆる敏捷な動きが密接に結びついた、曲集中最難曲である。

曲目解説：長井進之介（ながいしんのすけ）